

みんなで考える、子どもの未来

# あかつき 道徳 TIME

vol.

07

March  
2024

去る1月に東京で「深まる道徳授業セミナー」を開催しました。プログラムは、『足袋の季節』の模擬授業や『海と空一檣野の人々』の実践を通じた研究発表、シンポジウム。今号では、セミナー参加者の日ごろの学校や授業現場での悩みについて登壇者が答えていくシンポジウムの記録を一部ご紹介します。

## 「深まる道徳授業セミナー」シンポジウムから 現場の悩みにお答えします



(写真左から)

パネリスト

**川崎達也** (東京造形大学非常勤教員)

東京都立中学校校長を経て、現職。元全国中学校学年学級経営研究会会長。元全日本中学校長会生徒指導部副部長。元東京都教育委員会「人権教育プログラム」編集委員長・編集委員。

ファシリテーター

**齋藤嘉則** (東京学芸大学教職大学院教授)

宮城県仙台市立中学校校長、宮城教育大学教職大学院准教授から文部科学省初等中等教育局教科書調査官(外国語)。その後、香川大学教職大学院教授を経て現職。

パネリスト

**山本理恵** (千葉県東金市立東中学校教諭)

千葉県立中学校教諭を経て、現職。千葉県教育委員会指導者用映像教材作成。第28回上廣道徳教育賞：最優秀賞受賞。令和3年度文部科学省優秀指導者教員表彰。

パネリスト

**鈴木賢一** (愛知県弥富市立十四山東部小学校教諭)

愛知県立中学校教諭を経て、現職。第24回、第28回上廣道徳教育賞：優秀賞を受賞。

**齋藤** 今日教育現場での悩みにつ

いて、会場の皆様から事前にご質問をいただいていますので、お答えしていきたいと思えます。まず、先ほど『足袋の季節』の模擬授業をさせていただいた鈴木先生への質問です。これまでの『足袋の季節』の授業に共通している生徒の考えや反応で、「なるほど」と思ったことはありますか？

**鈴木** 『足袋の季節』の授業を何回かやってきた中で一番子どもたちから学んだのは、「後悔することは悪いことではない」ということです。筆者がなぜ悩むのかといったら、自分の中に「これじゃいけない」とか、「こうありたい」という、よりよく生きたい思いがあるからなんだというのが子どもたちから共通して出てくる意見です。それがこの教材のねらいなので、ここをみんなで深めていきたいという思いになりました。

**齋藤** なるほど、ありがとうございます。次に、学校全体で道徳を推進されている山本先生への質問です。他の先生方をその気にさせる工夫や仕かけについてうかがいたいです。

**山本** 本校では教科化する二年前に「道徳教育推進会議」というのを立ち上げました。その会議は、「教科化す

るので苦しいんです！」と言って、校長先生と教頭先生にも入ってもらい、他の先生に無理やり授業を見に来てもらうことから始めました。それがきっかけとなり、各学年の先生方が道徳科で出た生徒の意見を廊下に掲示したり、先生方の仲がよくなったりしていきました。まずは転入生のように「今日は誰と話そうかな」「明日はこの人と道徳の話をしようかな」と仲間を少しずつ増やす感覚で。全部をうまくしようと思うと苦しいけれど、一年経って二人味方ができたぞ、廊下の掲示は小さなコーナーから始める、それぐらいの感覚ではいかがでしょうか？



**齋藤** ありがとうございます。教師同士がよい授業を体験するのは私もいいのではないかと思います。次の質問です。**発言が少ない生徒に発言をしてもいい場合、どのような声かけや対応**

**応をするよいですか？また、ねらいから大きく外れた意見が出た場合、どうしますか？**

**川崎** 生徒の発言が少ないと怖いと思っているのは我々教師だけなんですよね。子どもたちは怖くない。考えているんだから。教師は一つ目の発言をしたらその後まったく話さなくてもいいと思うんです。年間で三十五時間あるので、長期スパンで見ても、しゃべる時間があったり、考える時間があったりしてもいいというぐらいの余裕をもつことが大事かなと思います。

**齋藤** はい。ありがとうございます。それでは今度は、**意見の出し合いや話し合いについていけない生徒をどうやってすく上げていったらいいか。**これについては、山本先生どうぞ。

**山本** 私のやり方はほんの一例ですが、ついていけない子はその時間の中で無理やり落とし込ませることはしません。あとで話しかけに行ったり、生徒と交わす生活ノートで授業でどんなことを考えたのかとやり取りをしたりと、個別に時間をかけてアタックします。私自身もぱっと思いつくときとそうでないときがあるので、生徒だって同じだろうなと思っています。

**齋藤** 私が道徳に取り組み始めた頃に



観た道徳授業のビデオが印象に残っています。一時間の授業の中で発表している子どもは四十人のクラスの中で十人ちよつとなんです。発表が得意な生徒と不得意な生徒がいますが、不得意な生徒も発表している生徒に向かってみんな顔を向けてうなずいたり、自分とは逆の意見の発表には首を横に振ったりしている。それでいいと思うんです。そのとき発表できなかった生徒も、コップに水がいっぱいになって溢れるように発言するときがあります。そのときに発言したらもう褒めるんですよ、よく発表したねって。そのくり返してそういう生徒たちも発表するようになっていくと思います。

では次です。**教材を範読する際に意識するよいことは何ですか？**

**鈴木** 範読の際に意識していることは、とにかくその教材を理解してもらえ

ようにすることです。分かりにくいところがあれば補足しながら読みます。教材の理解が土台にないと、そこから発言も考えにくくなってしまいます。**齋藤** 教師が範読する意味というのは今おっしゃった通りですよ。子どもたちの顔色を見ながら読む速度を変えたり、分からない単語を説明したりしながら、という風になると思います。次の質問です。**効果的な振り返りの仕方や終末での話の終わらせ方には、どんなものがあるかを知りたいです。**

**山本** 話し合いが活発になってどんどんいろんな意見が出てきたとしても、そのままではいけないですよ。やはりねらいに向かってこの授業の中で何を学ぶことができたのかというのが振り返りの意義だと思っています。授業



が終わってからの振り返りというものもありますが、授業の後半に入る頃に、「このクラスではこの授業についてどんな考えをもったんだろう。」というのを一度学級の中で共有するというのも振り返りの一つだと思っています。

終末にいく前に板書を眺める時間を作るなどして、「この授業のここまでの中であなたは何を学ぶことができたんだろうか。」と聞きます。すると生徒たちは、この時間、思考がどういう風になら流れてきたのか、このメンバーとどんなことを考えてきたのかという風にじっくり黒板やタブレットを見て、「僕たちはどんな時間を過ごしてきたんだろう。」と考えます。これは、ねらいに向かつて考えるために意味のある振り返りかなと思っています。

**川崎** 授業の最後に今日の授業の感想や学んだことを書かせることがあります。余韻を残して終わってもいいし子どもたちの顔を見て「考えているな」と思ったらわざわざ書かせる必要もない。書くことよってまとまることもありますが、先生に読まれるときに悪いことは書きたくない、いいことだけ書くというのは、どの子もあることですよね。担任が子どもの変化を文字や言葉以外の部分から見分けていく力を



つけていく必要があると思っています。  
**齋藤** ありがとうございます。次に、**生徒の思考を深める問い返し**の仕方を**知りたい**という質問です。

**鈴木** 一つの発問に対して一通り意見が出たあと、そのまま次の発問に移る授業がよくありますが、それでは深まりにくいのではないかと思うんです。せっかく深い学びにつながる鍵となる意見が出たのだから、それを使えばいいと思います。それらの意見の中から「改めて共感や納得したものはどれかな。」「そこに付け足してみよう。」とか、「もう少し聞いてみたいものには質問をして、そこから新たな考えが出たらいいよね。」と。この三つをしていくことが問い返しにつながるのではないのでしょうか。「問い返すぞ」とか「深めよう」、そんな風に強く思わなくても子どもたちの力を借りながら

十分やっているとと思っています。

**齋藤** ありがとうございます。では次です。**不登校の生徒や外国からの転入生への支援はどうしたらいいですか？**

**鈴木** 実際に私の勤務校で行ったことですが、不登校の子どもがオンラインで授業に参加したことがありました。画面をオフにして、参加しているということ自体もクラスメイトには伝えずに、教室の後ろの方にタブレットを置いて、教室の雰囲気とか、みんなの意見の様子とか授業の雰囲気をつかんでもらうぐらいのつもりでした。しかし実はその子にとってはすごく刺激になったようで、振り返りを自ら書くと言いつつ、そのクラスの中でもかなり深い意見を書いてきてくれました。今はそういう参加の仕方も可能だと思いました。

**山本** 外国籍の生徒は多分このクラスにも複数いると思います。そんなときは、文明の力を味方につけるのがいと思っています。カメラで教材を映すと文章を翻訳してくれる機能があるので、事前にそれを使ってプリントアウトしてあげるなどしています。またこれは私が強く思っていることですが、自分の考えは母国語で書いてもらいます。もし自分が他言語の国の子どもだ

としたら、考えをもっているのによく言えなくもやもやするのはとても嫌なことだと思っからです。

**川崎** 中学校の校長を退職後、希望して特別支援学級の担任を三年務めました。そこで不登校の生徒がいました。やはり道徳が一番関わりやすいと思っしたので、毎回授業が終わったあとに、振り返りを振った資料と他の子どもたちの発言をすべて一覧にして送りました。結果的にはそれで不登校が解決されたわけじゃなかったんですけど、保護者の方が楽しみにしてくれていたのが印象的でした。それがもしかしら次に繋がればいいかなと思いました。

**齋藤** 読解が得意でない生徒たちには**どのような手立てが考えられますか？**



鈴木 やはり範読のときに補足の説明

を入れるとか、範読の前に人物関係を整理するとか、あるいは今だったらICTが使えるので視覚的な支援を入れたりとかといったことでしょうか。

山本 ボリュームがある読み物教材は、事前読みの時間をとることがあります。その際、友達から友達に説明をするようなペアが出来上がる場合があります。「言っていること分かる？」などけっこう辛辣なことを言い合うのですが、事前に子ども同士で場面を把握させる

つてというのが必要なこともあります。齋藤 文章を読むことは、映像と比較して情報量が少ないから人間の頭の中

でいろいろと考え想像すること、が実際に科学的に証明されています。いわゆる文脈や行間を読む。これが結局、道徳の授業を進めていく上でとても大切です。なぜかと言うと、教材を

読む想像力は子どもたちが今まで培った知識や体験を基盤として生まれるわけですね。だからこそ教材の登場人物

に自分自身を投影させやすいのです。また、山本先生がおっしゃるように、

友だちどうして辛辣ながらも「分かってんの？」「分かんない。」などと言いながら教え合うことが、とても大切な



クラスでの活動だと思えますね。では

学級経営の視点から、川崎先生どうぞ。川崎 私は学級経営、学年経営の視点

で一番大事なのは友だち同士のコミュニケーションだと思っています。子どもたちの中には社会があつて、その中に役割

分担がしっかりある。理解が遅い子に対して劣等感をもたせないようにすることが、子どもたちの間でできちゃ

うんですよね。齋藤先生がおっしゃったように、我々教師は考える時間とい

うのを与えなさすぎている、すぐ結果を求める部分がある。考える時間、余裕のある時間というのを作つてあげる

いればいいわけです。

齋藤 最後の質問です。働き方改革がいわれている中で、教材研究や授業研究会をどのような形でやるのがよいのかうかがいたいです。

山本 本校では全体で進めることによる時間の削減を図っています。先ほどお話しした「道徳教育推進会議」もコマの中に埋め込んであるので、放課後にやることはありません。教材研究に

ついては、皆さんも学習指導案や教材教具の共有化やデータ化はされていると思うんですけども、最初は学校の中にあるもので授業をやってみるって

いうことではないでしょうか。もしそういうストックがない学校にお勤めの先生はいろいろな出版社などから出ているものを参考にしてもいいと思

います。また、各先生方の得意な内容項目もばらけていると思います。子育てを経験したベテランの先生は生命

や家族愛、山登りなどの趣味を通した内容項目を得意としている先生もいる

かもしれません。それぞれの先生の強みを生かし合いながら、とにかくもらえるものはもらう、できないものは検査の力を使う、あまり堅苦しく考えずに教材研究をやった方がいいのではな

いかと思つています。

川崎 ローターション道徳をしてらっしゃる学校はありますか？ 皆さん、だいぶ浸透してきていますね。例えば一年から三年までもち上がる場合、一

つの教材の授業を一回やったら三年後までやらないというのではうまくありませんよね。だから各学年に三クラス

あつたとしたら授業を三回やれば上手になります。視野も広がって、いい循環になるのではないかと思います。齋藤 ありがとうございます。これで皆さんからいただいた質問は以上です。

